

令和3年度文学研究科博士論文要旨

「黒社会」の巨頭杜月笙の総合的研究

— 1920～50年代 —

文学研究科歴史学専攻 水町誠司

杜月笙は上海租界の重鎮であり秘密結社青幫の頭目かつ「上海三大亨」の一人であった。杜月笙に関する研究は多数存在しており、杜月笙と同じく「上海三大亨」である黄金栄、張嘯林の研究よりも豊富である。ただし、杜月笙が秘密結社の無頼人物であることから、歴史的観点からの実証性には乏しい研究も多数存在している。主に研究が行われているのは中国である。日本では青幫や秘密結社に付随して研究されることはあるが、杜月笙自身を中心とした研究は管見の限り存在しない。

そのような中、本論文の特色として杜月笙を歴史学の観点から考察、分析して、その立ち位置を詳細に明らかにした。1920年代後半から1950年代初頭までにおける、杜月笙の勢力や権力、権益や利益、それらの影響力に対してできる限り実証的に迫り、考察や分析を加えた。その結果、杜月笙は上海において、政治的、経済的及び黒社会（中国の裏社会）、上海租界の外国人や最下層民を含めた社会全体に絶大な影響力を有していたことを解明した。また、論文を含めた研究にて希薄であった、杜月笙の黒社会における具体的な活動や、日中戦争時期に南京で成立した汪精衛政権及びその背後にいた日本軍との関係にも焦点を当てたことは、本論文の特色と言えるだろう。さらに、従来の論文にてほぼ扱っていない、杜月笙の晩年の動向に関しても、その焦点を当てている。その他、杜月笙の動向の中でも特に印象的である上海クーデター（四・一二クーデター）における弾圧、先祖を祭る祖廟の落成式の開催、政治団体である恒社の成立、日中戦争時期の香港滞在中に行ったフィクサー活動等にも視野を広げ、考察や分析を加えている。

本論文は全7章構成であり、その他に目次や序章、終章や注、及び史料・研究書・論文・その他参考文献の一覧が含まれる。第1章の「杜月笙と四・一二クーデター」では1927年4月12日に発生した四・一二クーデターに関して、杜月笙らが国民党側についた理由や計画などの事前準備、四・一二クーデターの実行、その後の推移や影響について取り扱う。1927年3月頃まで、杜月笙や

黄金栄、張嘯林など青幫の勢力は国民党側、共産党側双方及び、上海で影響力を持つ直隷派の軍閥からもアプローチを受けていた。杜月笙らは3月末から国民党の蒋介石、楊虎、陳群らと接触して関係を築きはじめ、国民党側が共産党側に不信感を持っていることを知らされた。また国民党の勢力が最も大きく将来も有望であり、アヘン取引の利益も比較的容認していたため、杜月笙ら青幫勢力は国民党側につくことにした。杜月笙らは武器供給など国民党の援助を受け、四・一二クーデターを実行し、上海から共産党の勢力を殲滅することを決定した。まず四・一二クーデターの前日に、共産党員の若手のリーダー格であった汪寿華を暗殺した。そして四・一二クーデター実行日に、杜月笙らは青幫の構成員を動員して、武装したピケ隊と化した共産党員に攻撃を行った。その後、国民党の軍隊である国民革命軍が仲裁する体裁で介入し、青幫の構成員と共産党員双方から武器を回収した。共産党員は国民革命軍を味方だと思い武器を差し出したが、武器回収後に国民革命軍は改めて共産党員に対して鎮圧、弾圧を行った。上記の功績により、杜月笙、黄金栄、張嘯林は蒋介石から陸軍少将などの地位を与えられた。

第2章の「杜月笙と祖廟—落成式を巡って—」では杜月笙が建設した自身の祖廟及び、完成記念として開催された落成式について取り扱う。杜月笙は祖廟の落成式を上海史上最大規模の祭典として開催した。この祖廟の落成式の成功により、杜月笙は影響力、各種利権、名声を大きく高め、杜月笙は上海で最も勢力のある人物の1人だと認知され、さらに杜月笙の名声も中国全土に広まった。この落成式は、1931年6月9日から11日の3日間行われており、連日大盛況であったという。『申報』をはじめ、当時の各新聞が連日杜月笙の祖廟の落成式を記事にしており、日本など海外の新聞も記事を掲載したことから、メディアの注目度も高かったといえる。記念の扁額も多数贈られており、上海の著名人に留まらず、中国各地の著名人や有力者、上海の総領事からも扁額が贈

られていた。また、祖廟のための祠堂記も中国各地から贈られており、杜月笙の祖先が捏造された形で（夏王朝の貴族だった、老子を祖先に持つなど）記載している。演劇も落成式の開催時に多数行われており、中国各地から京劇の男優、女優が集まって演目を行っている。なお、祖廟は本来親類と共同で出資や建設を行うものであるが、杜月笙の祖廟の建設に関して親類は協力しておらず一切関わっていない。その理由として、杜月笙は親族と疎遠であったことが挙げられる。

第3章の「杜月笙と高級社交クラブ恒社の実態—一人脈の形成—」では杜月笙が自身の勢力を高めるための組織として「恒社」という高級社交クラブを設立したことを取り扱う。杜月笙は1932年後半に恒社の活動をスタートさせており、この段階ではまだ法人ではなく、クラブ形式であった。その後、1933年2月25日に杜月笙は恒社を正式に設立し、フランス租界に政治団体として登記を行った。なお、恒社を名目上政治団体にしたのは、杜月笙が政治の世界にも興味関心を抱いていたことと、杜月笙の門下である陸京士などの提案によるものである。杜月笙は青幫において最大の勢力を誇っていたが、青幫の規則の関係上、青幫のトップにはなれなかった。しかし、杜月笙は自身がトップとなる組織で物事を動かした方が、自分1人の力だけで物事を進めるより勢力や利益を伸ばせると考えていた。そこで杜月笙は、自身がトップとなる組織として恒社を設立した。恒社は表面的には黒社会の秘密結社の系統ではなく、いわゆる「表社会」の有力者や名士が集う高級社交クラブとしての側面が強い。そのため、恒社の設立により杜月笙の名前や勢力、権益などに惹かれながらも青幫を敬遠していたような、表社会の有力者や名士を加入させ引き寄せた。そして、杜月笙は彼らと人脈を築くことにより、相互利益を得て政界や経済界など、上海各界により大きな影響力を持った。なお、恒社での活動の中心はアヘンの吸飲や京劇鑑賞、賭博行為であり、杜月笙個人の趣味趣向が強く反映されている。恒社の最盛期は1936年から1937年の第二次上海事変前であったが、その活動は1949年に杜月笙が香港へ移動するまで行われていた。

第4章の「杜月笙と慈善活動」では、杜月笙が慈善活動に熱心であり、平時緊急時を問わず大金を寄付していたことについて述べる。杜月笙は個人での義捐金はもちろんのこと、チャリティーを主催して集まった金額や、街頭募金など集団で寄付を呼びかけて集まった金額も寄付している。また、他の人物が立ち上げたチャリティーや慈善団体にも義捐金を送り、杜月笙自ら義捐金集めに協力していた。これらの活動は杜月笙の義侠心もあるが、

当時の中国では、黒社会の人物が表舞台に立つ際には慈善家を名乗ることが多かったこと、杜月笙は表舞台へ大々的に進出し各種利権や影響力を手に入れたかったことが影響していた。そして、上海の名士としての地位や名声もより大きなものになった。

第5章の「杜月笙の「表」と「裏」の経済活動—中滙銀行、三鑫公司など—」では、杜月笙が行った「表社会」での経済活動と、黒社会での経済活動の両方を研究し、杜月笙が具体的にどのような経済活動を行い、どれだけの利益を得たのかを述べる。杜月笙は表側の経済活動にて、自身が設立した中滙銀行などでトップの役職である董事長となった。その他銀行や製粉、紡績、交通といった各業界の企業に対しても、董事や理事などの重役となり、問題発生時にそれを解決する後ろ盾となっていた。また、上海で労働紛争が発生した際、杜月笙は積極的に仲介を買って出ており、労働紛争を多数解決している。ただし、完全に清廉潔白であったわけではない。例として、『申報』の董事長である史量才が蒋介石の指示を受けた特務に暗殺された後、蒋介石の意向によって杜月笙が『申報』の董事長として就任していた。一方で、黒社会における経済活動については、はじめはスリなどの窃盗活動を行っていた。そして、黄金栄に重用されてからは三鑫公司などでアヘンの運搬や売買、181号にて賭博場の管理や経営といった活動を行っていた。杜月笙は黒社会において、基本的には闘争的な荒事よりも、アヘンの取引や賭博場での経営活動を積極的に行っていた。時には四・一二クーデターのように青幫の構成員を大勢動員し、共産党員を弾圧することもあったが、杜月笙にとってはあくまで各種利権を手に入れるための一手段に過ぎなかった。

第6章の「杜月笙及び「上海黒社会」と日中戦争」では、日中戦争時期に杜月笙、黄金栄、張嘯林が、各勢力（蒋介石率いる国民党、共産党、日本軍、汪精衛政権をはじめとした日本の傀儡政権など）に対し、どのような関係を築き、どれだけの各種利益を手に入れたかについて取り扱う。杜月笙は基本的には蒋介石が率いる国民政府側につき、蒋介石の命を受けて暗殺指示を出す、密約を暴露するなどの活動を行っていた。ただし、完全に蒋介石側に付き従っていたわけではなく、ある程度の距離を保っていた。そのため、1937年の上海陥落後はあえてイギリス領である香港に移動していた。そして、太平洋戦争が勃発し、香港が陥落する直前の1941年末まで香港に滞在した後、重慶へと移動した。また、周仏海を通じて汪精衛側とも連絡を取り合っていた。杜月笙が汪精衛側に寝返るのではないかと、周仏海に思わせるほど

には関係を築いていた。また、杜月笙は重慶に滞在していた1943年頃、綿花など不足物資を入手するため日本軍とも複数回にわたり物資交換の取引を行うといった関係も築いていた。黄金栄は日中戦争時期にて、上海に留まっていた。その理由として黄金栄は、政治的な物事に積極的には関わる気がなく、人生のほとんどを上海で過ごしており、既に高齢で隠居気味であるなど、純粋に上海を離れたくなかったことが大きな要因である。そのため、黄金栄がいずれかの勢力に付き従うことは最後までなかった。張嘯林は1930年代より蒋介石と不仲であったこと、日本側の方が自身に利益をもたらすと考え、傀儡政権側について上海で活動していた。実際に、傀儡政権側や日本軍は張嘯林を重用して取り立てており、例として1939年に張嘯林を浙江省の省長に任命している。ただし、蒋介石や戴笠が張嘯林暗殺の指示を杜月笙に出し、杜月笙が張嘯林を暗殺するため部下を送り込んだ結果、張嘯林は1940年8月に暗殺された。

第7章の「杜月笙と日中戦争後における動向」では、日中戦争以降における杜月笙と黄金栄の勢力や影響力、第二次上海解放後の中華人民共和国に対する関わり方などを取り扱う。杜月笙は日中戦争で中国が勝利した後上海へ戻ったが、その勢力や影響力は衰え始めていた。理由として、蒋介石から冷遇され関係が悪化した上、1946年に門弟の戴笠が飛行機事故で亡くなり、租界が消滅し外国人の人数や勢力、影響力が減少するなど、杜月笙の後ろ盾が複数消滅、縮小したことが挙げられる。さらに、日中戦争時期に8年近く上海から離れていたために、上海で杜月笙の対抗勢力が台頭してきたことも、杜月笙の勢力が衰え始めた理由の1つである。国共内戦期、杜月笙は上海解放直前に香港へと移住したが、喘息など病気による体調悪化により、活動が停滞気味であった。さらに、上海の地盤が完全になくなり、利益や権益が大幅に減少していた。しかし杜月笙の移住後、香港で青幫勢力が活発となるなど、影響力が消滅したわけでは

なかった。ただし、1951年に杜月笙が亡くなると青幫の勢力も衰え、台湾を除き1950年代半ばには消滅したと考えられる。黄金栄も、共産党による上海解放後に財産の大部分を接収され、大世界などにおける役職や経営権も接収された。さらに、黒社会での利益追求活動も厳しく制限されたため、晩年の黄金栄は質素に暮らしていた。そして、共産党の指示でかつて所有していた大世界の前で掃き掃除をさせられる、長文の自白書を書かされ新聞に掲載されるといった活動を行っている。

つまるところ、①杜月笙は黒社会の出自であり、ほぼ無学であった。儒学中心の伝統的な知識人層や、豪商や地主など代々の富裕層とは根本的に異なる。しかし、杜月笙は清朝末期から中華民国にかけて、政治や社会の混乱、上海で顕著だった近代化の時代を利用し、一代にて表裏両方で大きな勢力を築いた。上海の経済や社会にて租界の外国人を含め、最も影響力を持つ人物の一人となり、上海、率いては中国全土の政治活動に携わり、外国からも一目置かれる存在となった。②杜月笙の役割としては、この影響力を行使して上海の労働紛争を解決し、貧困層に対し慈善活動による生活保障を行っていた。行政の手が回らない状況で、社会の安定化を図っていたといえる。一方でアヘン取引や賭博場経営などで黒社会の頭目として活動し、青幫をはじめとした黒社会の勢力拡大を行った。結果として上海は魔都と呼ばれ、世界各国の大都市の中でも特に治安の悪い犯罪都市として名前を轟かせることとなった。③杜月笙における重要な意義の一つに、四・一二クーデターや日中戦争時期にて蒋介石の指示を受け活動し、中国全体の情勢に影響を与えるフィクサーとなったことが挙げられる。また、国民党に留まらず中国各地の軍閥、日本や日本傀儡政権、共産党員に対し、杜月笙はその影響力の大きさにより相互利用、相互利益の関係を築いていた。このような関係も、中国全体の情勢に影響を与えていたといえよう。